

大阪市立科学館の VI(ヴィジュアル・アイデンティティ) 設定と展開について

竹浦 雅美*, 永原 達哉*, 渡部 義弥*

概要

展示改装に先立ち 2022(令和4)年度に、大阪市立科学館の VI(ヴィジュアル・アイデンティティ)の検討を行い、シンボルとしてふさわしいロゴマークを設定した。ロゴマークはシンボルマークと館名ロゴタイプのセットからなる。本稿では、その設定の経緯と展開について報告する。

1. はじめに

これまで館名を記す際に、さまざまなフォントが使用されており、館内表示や広報物等において統一されていなかった。

そこで、大阪市立科学館展示改装基本計画[1]に基づき、展示改装を機に、VI(ヴィジュアル・アイデンティティ)の検討を行い、大阪市立科学館のシンボルとしてふさわしいロゴマークと館名ロゴタイプ(文字列)をセットで定めロゴマークとした。それらを核として大阪市立科学館を視覚的に統一的なイメージで現すことによるブランディングを進めることとした。

このVIの検討は、大阪市立科学館と大阪市立科学館展示場等改修業務委託事業者である株式会社丹青社が共同で行った。当初は丹青社の提案をベースに検討したが、最終的には大阪市立科学館が職員のアンケートやブレインストーミングを経て案、考え方を示し、それを丹青社がデザインワークで形にしていき、両者のディスカッションでブラッシュアップしていくという方法で行った。その結果が最終案となっている。

本稿では、VI 設定の経緯と展開について報告する。

2. ロゴマークの設定

ロゴマークは VI に含まれる一つの要素であり、ロゴマーク単体で考えるのではなく、館内サインや広報ツ

ール、グッズなど、他の要素への展開も含めて検討する必要がある。

当館では、基本形として3種類のロゴマークを定めた。用途に応じて、様々な形状のスペースに使用できるよう、縦組み、横組み、正方形に近い形状を設定することとした。



図1. ロゴマーク(基本形)

*大阪市立科学館

ロゴマークを構成する要素として、シンボルマークとロゴタイプがある。それぞれ詳細は事項のとおりである。

3. シンボルマークの設定

シンボルマークの設定においては、類似したものがないことはもちろん、大阪市立科学館の事業目的に合致したものである必要がある。

2022(令和4)年10月から株式会社 丹青社とデザインの検討を開始し、複数の候補が挙がった中から職員へのアンケートも実施した結果、モチーフがわかりやすく、モーション(動的要素)として使用するなど展開のバリエーションから、2023(令和5)年3月、図2のデザインを採用した。

シンボル決定にあたっては、モノクロ印刷においても視認しやすいものとするなど、実用面も考慮した。

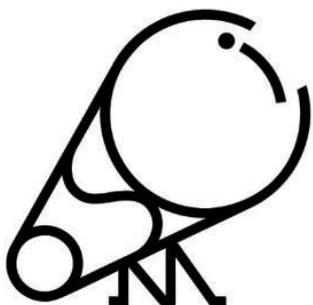


図2. シンボルマーク(基本形)

シンボルマークの当初のデザインコンセプトは以下のとおりである。

ア) 前身が日本初の科学館である「大阪市立電気科学館」であることなど、科学館としての伝統を感じられるものとする

イ) 宇宙・天文、物理、化学、気象、科学技術等、展示や活動で扱っているテーマ、つまり科学的探求の対象を想起できるものとする

ウ) 科学の発展に不可欠な人間の探究心の象徴として望遠鏡をモチーフとし、広く現象を観察するという科学に対する基本的行動を表すものとする

エ) 館の英名である“Osaka Science Museum”の“O”、“Sci”、“M”をマークに取り込み、大阪市立科学館であることを主張できるようにする

このうち、ア)については、シンボルマークでは表現できなかったため、次に述べるロゴタイプにて表現することになった。

なお、今回設定したシンボルマークは特許庁へ商標登録の申請を行い、2024(令和6)年4月8日に登録された。

4. ロゴタイプの設定

本節では、新しいロゴタイプのデザインとその設定の経緯について述べる。

新しいロゴタイプ(日本語、英語)は図3のとおりである。

大阪市立科学館 OSAKA SCIENCE MUSEUM

図3. 今回設定したロゴタイプ

4-1. ロゴタイプの概説・意味

新しいロゴタイプは、日本語のものを作った後に、英語のものを定めた。英語は、日本語のロゴタイプやシンボルマークと組み合わせた時のバランスを考えて設定している。一方、日本語のロゴタイプは宋朝体を模した書体を採用した。これは、1937(昭和12)年に開館した大阪市立科学館の前身、大阪市立電気科学館の看板の書体(宋朝体)をベースとしたもので、日本初の科学館である大阪市立電気科学館の歴史を継承し、科学教育・普及、市民の科学文化の拠点としての伝統を持つことを表現した。リニューアルにさいして大阪市立電気科学館の展示や同館の設置と同時に公開された日本初のプラネタリウムで使われた投影機カールツアイスII型をシンボリックに展示しはじめたリニューアルにおける展開ともマッチさせたものである。シンボルマークは活発な未来志向、ロゴタイプは伝統の継承と蓄積をイメージしやすいものとするなど、目を引く、シンボルとなるといったロゴデザインの基本的な役割と同時に、大阪市立科学館の位置づけを対外的にアピールしやすいデザインとなっている。

4-2. ロゴタイプの検討。シンボルマークの付属から独自の価値を持つものへ

ロゴタイプの検討は当初、シンボルマークに従属する形でスタートした、シンボルマーク案が絞られた時点で、あわせてシンボルマークにバランスがよいフォントを変形し選び日本語の「大阪市立科学館」を作字し、あわせてそこにマッチする英語の「OSAKA SCIENCE MUSEUM」をはめ込むという形にしていた。

当初、シンボルマークとロゴタイプは一体でのみ使用するという、個性はシンボルマークで出すという考えがデザインワーク担当にあり、この形式での検討が進められた。

しかしながら、シンボルマークがモダンな未来志向となる方向が明確になるなかで、大阪市立科学館の伝

統や歴史をどこかで表現したい、特に前身となる日本初の科学館・プラネタリウム館である大阪市立電気科学館からの継承を表現したいという思いも職員の中でふくらんでいた。

シンボルマークでそれを入れ込むことは難しい中で、事務所内でのブレインストーミングをする中で、「大阪市立電気科学館」のロゴタイプを流用するという案が登場した。すなわち、電気を取ることで「大阪市立科学館」となるというアイデアである。

その下敷きを探る中で、正面玄関の表札(図4)が大きく文字が出ていることがわかり、これを利用するアイデアが職員間での賛同として広がった。



図4. 大阪市立電気科学館の玄関看板

問題は、このロゴタイプをどう現在の大阪市立科学館のロゴタイプに着地させるかである。

当初丹青社のデザインワークでは「宋朝体の近いものをもってきてアレンジする」ものであった。しかし、比べるとところ字は似ていても違うものとしか見えなかった。そこで、大阪市立科学館としては、大阪市立電気科学館の看板のフォントをトレースするという要請を強く行った。ただし、「学」や「館」が旧字体であるため、これらについては、書体の要素を保ちつつ現在の字体に改訂作字をし、全体の止めはねなどの調子をオリジナルのものと同じになるよう調子を整えることをデザインワークに要請した、こうして数次の改訂を経て着地したのが図3である。

現在、世の中は様々な価値を見いだすさいに、ナラティブ(物語性)要素を要請している。本ロゴタイプはまさしく、いたずらに新しい創作をするのではなく、歴史や伝統に敬意を払いながらデザインするものになっており、今後使用するにあたってはナラティブを体現しつつ語れるものになった。

5. カラーの設定

ロゴマークについては、白色・黒色の2種類をカラーとして設定し、モノクロ印刷においても視認しやすいも

のとした。

背景色の基本カラーにおいては、望遠鏡がシンボルマークに設定されたため、宇宙・地球をイメージする「青色」、特別感を演出する「金色」など複数のカラーが候補に挙がった。最終的に、当館の展示テーマ「宇宙とエネルギー」に関連して、星の煌きとエネルギーの代表として電気をイメージさせる「黄色」を基本カラーとすることとなった。また、黄色にも「レモン色」「菜の花色」「ひまわり色」など様々なバリエーションがあり、ロゴマークとの相性をシミュレーションした結果、「DIC57・C0/M10/Y85/K0」の黄色を背景色の基本カラーに設定した。

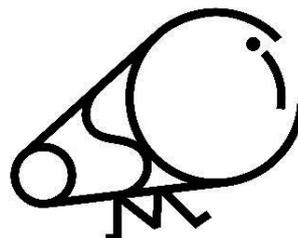
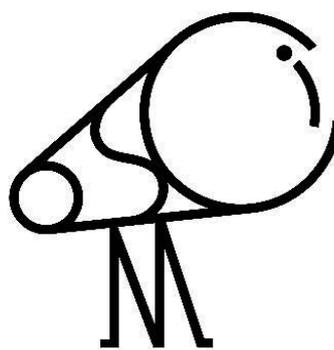
また、設定にあたっては、館内サイン(壁面デザイン)、名刺や名札、ポスターやチラシなどの広報ツール、パソコンやデジタルサイネージなどの画面表示などで同じトーンで使用できる必要があり、決定にあたっては、印刷用紙や手法によって色のイメージが大きく変わらないことも重要な要素であった。

6. ロゴマークのパターン設定

公式・広報ツールなどオフィシャルな場面では、原則として基本形のシンボルマークを使用することとし、新しくなったロゴマークの浸透に努めている。

一方、ミュージアムショップのグッズ展開などにおいては、様々な動きのあるシンボルマークも使用することで、多様なグッズ展開を可能にしている。

また、使用においては、シンボルマーク、ロゴタイプそれぞれの単体利用も可能とし、汎用的なものとした。



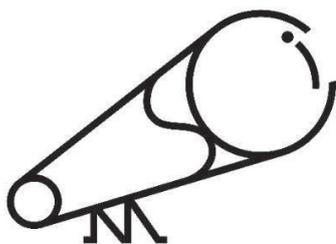


図5. シンボルマークの「展開形」

大阪市立 科学館

図6. ログタイプの特体使用例

なお、シンボルマーク、ログタイプの特体組み合わせの展開においては、複数パターンを比較検討し、最終案とした。



図7. 展開パターンの検討例

視認のしやすさから、最終的に左のロゴマークを採用した。

7. VI マニュアルの作成

ロゴマークを一貫して使用するため、ロゴマークの設定と合わせて「大阪市立科学館 Visual Identity manual」[2]を作成し、ロゴマーク使用時の余白や使用禁止例などを定めた。



図8. VI マニュアル 使用禁止例のページ
大阪市立科学館 Visual Identity manual (2023) より

8. 公式・広報ツールへの展開

公式・広報ツールにおいては、基本カラーと基本形ロゴマークの使用を原則とし、あわせてフォントも設定することで、ツールの一体感をもたせ、視覚的に統一されたイメージの普及に努めている。

8-1. フォントの設定

8-1-1. 外部制作用フォント

リーフレットや封筒など主に外部に制作を委託するツールについては、展示場で使用されているフォントから選定し、楽しい雰囲気を醸し出した。

ひらがな、カタカナ、漢字は「A1 ゴシック Std B」「こぶりなゴシック Std W6」「こぶりなゴシック Std W3」、アルファベット、数字は「URW DIN」を原則としている。

8-1-2. 館内制作用推奨フォント

名刺、名札、プレスリリースなど、適宜館内で制作する必要のあるツールについては、職員の使用しやすさも考慮し、外部制作用フォントと雰囲気が近い Google フォントから、ひらがな、カタカナ、漢字は「Noto Sans JP」、アルファベット、数字は「Roboto」を推奨フォントとした。

推奨：アルファベット、数字

【大タイトル】 Roboto Bold

OSAKA 1234567890

【見出し】 Roboto Medium

Chinese Constellation and Japan

【テキスト】 Roboto Regular

Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Incidunt ut labore et dolore. Consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Incidunt ut labore et dolore. Consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Lorem ipsum

図9. 館内制作用 推奨フォント「Roboto」

大阪市立科学館 Visual Identity manual (2023) より

8-2. 公式・広報ツールへの展開事例（一部）

公式・広報ツールの一例を以下に示す。

8-2-1. 名札

科学館の職員、ボランティアなど科学館スタッフとゲスト(来客者)のIDとして名札を統一デザインで制作した。基本カラーの黄色の配色バランスを変えることで、科学館スタッフか来客者かを視認しやすくした。

また、名前(日本語と英語)と肩書のサイズと配置などミリ単位で調整を行った。



図 10. 名札

大阪市立科学館 Visual Identity manual (2023)より

8-2-2. 名刺

これまで名刺のデザインは各自に委ねられていたが、フォーマットを制作することで、統一のとれたデザインで制作できるようにした。

なお、裏面のロゴマークのC(望遠鏡に見立てるとレンズ)の部分においては、個人の専門分野に関するものやおすすめ展示の写真を入れるなど、個性を發揮できるスペースとして活用でき、名刺交換の際の会話のきっかけにもなっている。

名刺作成フォーマット

- 所属、肩書、特記事項、氏名のフォント
Noto Sans JP Medium
 - 氏名(英字)、メールアドレスのフォント
ROBOT Medium
- 赤枠内は変更不可です。電話番号については-5184を入れる場合は差し替えてください。
※赤枠は不要ですのでテンプレートにはありません。
- ※特記事項がない場合は所属名を特記事項の位置に配置してください。

図 11. 名札のフォーマット

8-2-3. 総合案内リーフレット/A4、巻き3つ折り

基本カラーとロゴマークを使用したデザインに一新した。黄色地に印刷されるため、文字情報にも配慮し、情報を選定することで、文字を大きく、太くし、地図はシンプルなデザインに見直すことで、可読性を高めた。

また、情報が多いフロアマップ部分は白地とした。日本語、英語版は表紙の上部に色違いのラインを入れることで管理しやすさも考慮した。



図 12. 総合案内リーフレット 折りたたみ時 (左)日本語版、(右)英語版

観覧料	大人	学生	中学生以下
観覧料 (1日有効)	400円	300円	無料
プラネタリウム (1席につき)	600円	450円	300円

図 13. 総合案内リーフレット(表面)

図 14. 総合案内リーフレット(中面)

8-2-4. ポスター



図 15. リニューアルオープンポスター

シンボルマークの特徴を活かし、さまざまな写真と組み合わせることで展示場の楽しさを演出した

8-2-5. 広報物

館名部分にロゴマークを使用している



図 16. 広報誌「月刊うちゅう」



図 17. イベント情報チラシ「科学館だより」

8-2-6. 角2封筒、長3封筒/レターヘッド

大阪市立科学館からのお知らせであることが一目で分かるように、ロゴマークと基本カラーのデザインとした。インパクトを狙い、全面黄色を使用する案もあったが、印刷コストの観点から、ワンポイントとした。

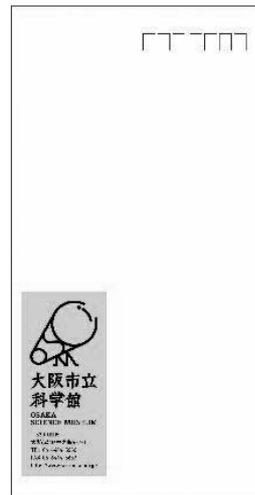


図 18. 長3封筒



図 19. レターヘッド

8-2-7. 公式ホームページ

ページ上部にロゴマークと基本カラーを配し、どのページからも当館公式ホームページであることを分かりやすくした。



図 20. 公式ホームページ(ヘッダー部分)

8-2-8. シンボルサイン



写真1. 屋外館名サイン

館内外のシンボルサインにおいて、ロゴマークを統一的に用いた。なお、詳細については、本報告 139 ページからの「大阪市立科学館におけるサインの検討、設置について」を参照されたい。

9. オリジナルグッズへの展開

当館ミュージアムショップのオリジナルグッズにも新しいロゴマークを使用し、その普及に活かしている。

オリジナルグッズへの展開を想定してロゴマークの設定段階で変容性を持たせて、見方によっては生き物にも見える動性があるデザインを要望として出していた。

シンボルマークの基本形のみならず、「展開形」の活用やカラーバリエーションも許容することで、さまざまなグッズへ展開が可能になった。

また、当館ではオリジナルグッズのデザインを科学館職員が手掛けることも多く、当館オリジナルグッズであることをあらかず館名部分にロゴマークを使用している。

9-1. オリジナルグッズへの展開事例(一部)

当館ミュージアムショップのオリジナルグッズの一例を以下に示す。

9-1-1. シンボルマーク(展開形)の活用例



写真2. トートバッグ

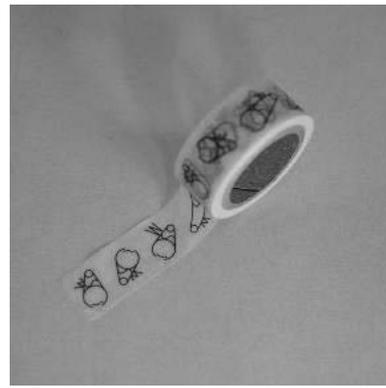


写真3. マスキングテープ

シンボルマーク(展開形)をランダムに配置し、動きのあるかわいらしいデザインに仕上げた。

9-1-2. シンボルマーク(基本形)の活用例



図 21. ラバーキーホルダー
(上から)黄、青、ピンク

ロゴマークの O の部分を円形からはみ出させることで、特徴的なロゴマークの形を活かしたデザインとした。

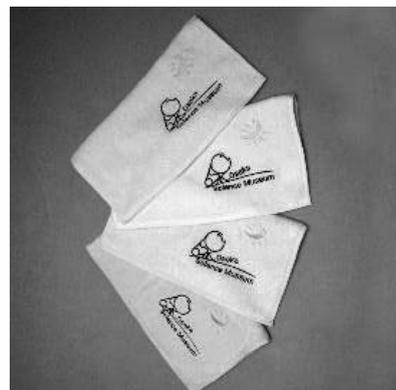
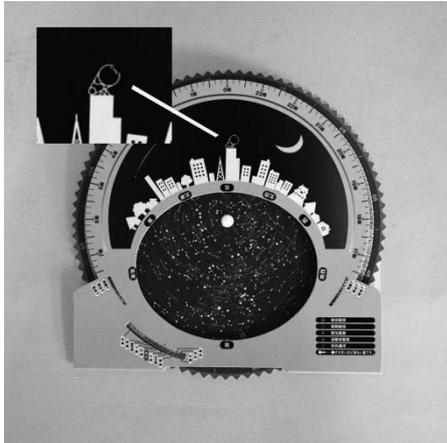


写真4. ハンカチ

刺繍の糸の太さなどを考慮しながら、ロゴマークの形を活かし、望遠鏡で月を眺めているようなデザインに仕上げた。



(表)



(裏)

写真5. 星座早見盤

シンボルマークが夜空を眺めているイメージでデザインした。

9-1-3. オリジナルグッズの館名にロゴマークを使用した例

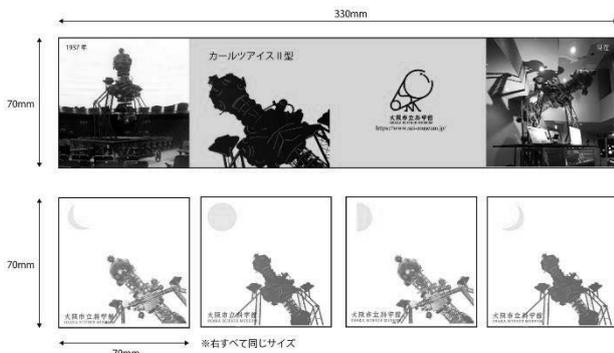


図 22. ぱたぱた付箋(展開図)

折りたたんだ裏面にロゴマークがシンプルに配置されるデザインにした。

10. おわりに

以上、本稿では、2024(令和6)年の当館リニューアルに伴って VI(ヴィジュアル・アイデンティティ)設定と、その展開について述べた。

その後、ロゴマークや基本カラーなどを使用にあたって、対面での名刺のやりとりなどでは注目されるシーンが以前に比べ増え、またロゴマークを通じて、館のあり方などのコミュニケーションをとる機会が増えている。これは狙いどおりであるといえる。

ただ、市民への浸透はまだこれからであり、あのマークをみたら大阪市立科学館となるためには、使用するスタッフが代替わりしていても、当初の意味を継承、発展させていく必要がある、そのためにも VI マニュアルをしばしば参照し、意味がぶれないようにする必要があり、館の関係者や広報にいつでも参照、利用できる状況を継続しなければならない。本稿もその一助となればと考える。

参考文献

- [1] 石坂千春ほか, 2023, 「大阪市立科学館第4次展示改装にかかる基本計画の策定について」, 大阪市立科学館研究報告第33号, pp77-82
- [2] 大阪市立科学館 Visual Identity manual(2023)